

農業・生き生きとした女性たち



ここに登場願った3人の女性は、今年3月東京で開催された「第2回田舎のヒロインわくわくネットワーク」で出会った方たちです。

今、農村の女性たちは、いきいきとして、語るべきものをたくさんもっています。

「ここではいつも自分たちだけで
生きているのではないという思いがあります」

栗田キエ子・和則さんご夫妻に聞く——山形県金山町

農林業の営み

キエ子 金山町の中でもこの地域は民有林が多く、山のものを生かして暮らすというか、山と密着した生活をしてきました。うちの場合山林は約50haあります。山の木をナメコ栽培の原木として使ってきました。原木に適さない木材は薪にして焚く、今でも薪ストーブを焚いています。昭和40年代の高度経済成長の頃石油ストーブのほうが

ストーブに変わりましたが、うちは祖父が作ったストーブが風呂につながる循環風呂で、風呂が自然に沸くということでずーっと薪を焚いてきました。建物は200年になりますが、家の中に水が引かれていて、物を冷やしたり洗い物をしたりという生活が続いています。周りは一旦石油ストーブに変えたものの、薪のほうが体の芯から暖まるということに気がついて、今ではこの集落全部が薪ストーブを焚いています。みんなの体の中にまだ記憶として残っていたから戻るのも早かったと

いえます。今年の冬は長かったから薪を焚きつくすほど焚きましたが、どの家も夏の間に薪を割って軒に積んでおきます。

うちの場合林業といっても、業、となるのかどうか。山は手入れをしていないと元も子もなくなりますし、木を切って植えると10年間は下刈りをしなければなりません。木を切るというのは生活のためではなくて、何かの時に貯金をおろすという感覚です。農業の部分で暮らして、山は貯金、弟たちの結婚の時や子どもが高校などに上がるとき木を切りましたが、切ったら植えるということをしています。

冬場の仕事として、ナメコ栽培を始めて25年になります。原木栽培は雪が降ると出来ないので、雪の中でもできるようにビニールハウスを建て、雑木のおがくずで10ヶ月間寝かせて冬場に収穫します。ナメコ栽培は私のやる仕事として、私の名義で管理もしてきています。

水田は2.3haありますが、減反が40aきています。減反もあって田圃の収入ではやっていけないのでナメコの他に、たらの芽をやって10年になります。ここは畑がないので、桑畑をやめた少し離れたところを借りて、10人で山菜研究会をつくりたらの芽を育ててきました。少しずつ増やしてきて今では18人、13haになります。

農山村に生きる

和則 一般的には産業論としての農業がいわれま
す。個々の農家がどうあってもいいような農業論
がありますが、それは我々とはかみあわないです
ね。

ここは14戸の集落ですが10戸になったら地域が
崩壊していくのは早いだろうと思います。ここで
みんなが暮らしていけないと自分も住み続けられ
ない。日々の暮らしは自分は自分で生きていくと
いうスタンスをつくりながら、地域として生きて
いく手段をみんなでも共有していかないと生きて
いけない。農村といっても都市近郊の農村とは違
います。

たらの芽栽培について関心をもって聞いてくる

人には誰にでも教えて、なるべく仲間を5人以上
作ってやりなさいといひます。農家は仲間を作っ
て一緒にやるということが苦手なのかなかなかや
ろうともしませんが、一人は一人でしかありませ
ん。何人かでやることで初めて生産地として成り
立つのです。

キエ子 私たちが今考えていることは、農業でど
うやって儲けるかではなくて、どうやって生活の
高見をめざして暮らせるかということかな。ある
程度自由時間がないとプラスαの部分をつくっ
ていけないから、片手はいつもフリーハンドだっ
て言ってます。

和則 金を作る部分を重視していけばいくほど、
その他の部分が削られていく。それは農村で暮ら
していく良さを切り捨てていくことになるだろう
と思います。

農家はほんとうに自分のために農業をしてきた
のだろうか、お国のためというか国民の食糧をつ
くることが役割であったり、それを意識しないで
も、自分の所得をあげるために農業をするといひ
ますが、自分のために農業をしているのではない
ような気がします。所得をあげるためだけに農業
をしているとなると、農業では食えないことにな
る。今は農業をやめなさいという雰囲気の中で、
農業をやりたい人がそれなりの生活をできる状況
であってほしいと思います。そうでなければいつ
か国はしっぺがえしをくうのではないかと思ひ
ます。

山で働くことは貯金なのだといわれてきました
から、だいたい年50日山で働こうとやってしま
した。現金収入がないから山の木を切らなければ
ならない、林業を一生懸命やろうとすると木を切ら
ないと生きていけない、林業の場合70年から80
年のサイクルですから切り始めたらどんどん先細
りになります。そのあたりから方向転換をしまし
た。こういう所で暮らして行くには換金作物だけ
に傾斜していくのは、時代の変動に左右されるか
ら非常に危険だと思います。でも一方で、現金収
入は必要です。

キエ子 田圃とキノコと多少の野菜で暮らしてい

た、それが生活の基本の部分として長かったから、子どもが成長して教育にお金がかかるようになった時に、たらの芽が始まってそれに向けられるようになった。残りはしないけれど、いい時期に始めたと思います。

和則 10年後をどうするといわれても、2、3年後はこうしたいという積み重ねでしかない。しかし10年後に不安はないですね。人にゆだねない暮らし方をしていきたいと思っています。そういう生活スタイルを大事にしていくと逆に自分の限界も早くわかりますから、人との関係を大事にしていきたいと思うし、山の中にいると外に友人をつくりたいと思います。それでも寄りかかる生活はしたくないということです。

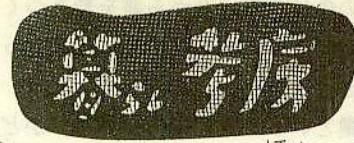
人との出会い

和則 35年の農業基本法から農業の形態はぐーっと変わってきました。農業基本法ができたときの想定された農業は都市近郊型の換金作物をつくる農業でしたが、古いスタイルの農業をやってきてこれでいいのかという不安がありました。若い頃は新しい物に乗ろうとする時がありますが、それに乗り切れないと思った時に守田志郎先生に出会いました。先生からこれでいいんだということは何度も言っていた。高度成長が始まった40年代に守田先生の「農業は農業である」という本が私たちに暗示を与えてくれました。農村においても企業になれという流れの中で、農業は企業になれないという論陣をはられた。自分の中にもやややかかえたとき、人と出会って、いつも乗り越えてこられたんですね。

農業青年で仲間を作っているいろいろやり始めたときに農文協との出会いがあり、岩淵専務さんが農家を大事にして下さって、いろいろな先生の話を知りたいというつれてきて下さった。仲間で話を聞いた後うちで泊まるということがずーっとありました。

キエ子 私も子どもたちを寝かせて一緒に話を聞くことができて、ほんとうにいい時間をもてた。

来て下さった先生方に、山菜のごごみなどを「何



第8号
1996年
7月10日発行
<暮らしの文化>
出版編集 都立山形大学
〒980-84 山形県 023-52-7122
守田和則・キエ子

△ 生まるぎの漆喰と 残るペンキのにおい。
1月26日 梁知事の「ふれあい訪問」にカマクジに間に合う
<ロケ・レポート>は
山形研究会の世話で梁知事の 名刺交換を後切りに
人に見え、語る場として スタートした。
階下は「梁知」に
2階には 梁知の色紙、内山節子のラウリィー・守田志郎文章。
板に木文章(題名)も少しずつ増えて
訪れた人々を 山道のゆつたりとした時を過る時...
山あいの段々田園を畑と 雑木林や杉山。
築後199年の曲家
白壁の2つのロケ(フェスティバル)とくまびと...
親子3世代が城川に白々に触れたいと 訪ね来る人々。
その人達にとって
ここが「何か」(etwas)の語が 待たれる場面に
なっている...と...
和則

△ 藍染の布を 日にかざしながら 山を見やると
木々は
葉をこぼれし 涙を生んで
涙を 染川 度根を した 見る...
新しい風
は藍色の風
すきさふから 吹いて行く... キエ子

もなく」と出すと「これが最高の贅沢なんだよ。おいしいんだよな。」とって食べてくださり、こんなものと思っていた物が喜ばれるのかと思いました。ちょうどそのころ買ってきて食べる物がいいんだという風潮が出てきた時でしたが、それに染まらないでやってこれたんですね。

農業体験受け入れ

和則 学生が最上郡内に農業体験に入ったのですが、隣町で世話をした人が病気になり、もともと子どもが好きだったこともあり、1年ぼっきりのピンチヒッターならお断りだということで40数人を受け入れた。私の場合、自分が受け入れるというより、どうやって仲間を集めようかと考えるのです。農家は毎年季節毎の同じ繰り返しの生活スタイルで、そこに他から人が入れば、自分たちの暮らしをもう一度考えるきっかけになる。来た学生に何を伝えられるか、何を見せられるかを考えようと農家の人に話し、金山町で20数軒受け入れ先を探しました。

いろいろな人を受け入れることによって、よそ

の人の言葉をいただいて自分たちを再発見し、自分たちのやっていることに自信をもっていくのだろうと思っています。また一方で自分たちが学生に伝えることもある。農家は行政の言うことをきき農協の言うことをきき農業をやってきたが、自分たちも伝える立場になるというか、逆転の立場の中で自分たちを考えてみることのチャンスとして多くの農家にやって欲しいと思ってやってきました。

ログハウスと藍染め

キエ子 「暮らし考房」と名付けたログハウスは、3年前山菜研究会の仲間とヨーロッパへ行ってドイツでグリーンツーリズムといわれる農家民泊を体験し、ぜひ取り組んでみたいと思ったのです。民泊施設としての<ログ・フェーリエン>と、藍工房と内山節・守田志郎ライブラリーのある<ログ・えとわす>を今年1月完成しました。

藍染めに取り組んだのは、かすりなどがまだ農作業衣としてあったし紺色が好きだったのもあります。扉は強くたたけば開かれるっていいですが、娘が行った農業高校の先生が藍を育てていて、苗をもらって育てたのが最初でした。でも、
すくも、にして、藍立て、をすることまで自分たちでできるとは思っていなかった。

すくもづくりや藍立ての技法は染屋さんでは秘

伝として簡単には教わるできないのですが、四国へ行ったとき四国女子大で藍染めの展示があって、そこで教えている先生と出会った。学生に教えるマニュアルがあって、データーも科学的に拾っていましたから私たちもやることができました。私が藍を育てて、葉っぱを乾燥させる。和則さんがすくもにして藍立てをしています。

いつもいい出会いがありました。

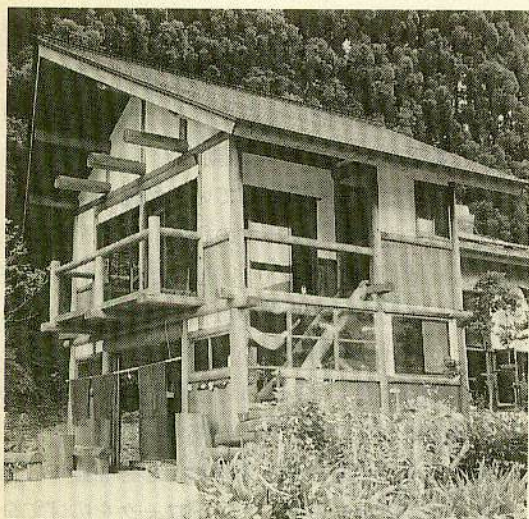
山里フォーラム in かなやま

和則 山村の過疎化が進み農業や林業の先行きに不安を抱く村の人たちと共に、豊かさとは何か、山村に暮らす意味合いは何かを問い直したいとの思いで生み出したのが「山里フォーラム in かねやま」です。今年8月24、25日が3回目になります。

哲学者の内山節さんとは10年ほど前から、年に1度は講義を聞く押しかけ生徒と先生の関係ですが、お金もなにもない中で思い切って話をしたところ、おもしろそうだとあっさり引き受けてくださり、その上思いもかけぬ、内山さんの仕事の一つとして関わってくださることになりました。フォーラム第1部は講師に内山さんを迎えての山里講座、第2部のシンポジオンは酒をくみ交わしながらの議論の場で、人の話を一方的に聞くのではなく、自分の考えを出し合うことを大切にしたいと思っています。地域の人と外からの参加をふくめて60名を越す人たちの出会いと交流の場です。フォーラムを支える大きな力となっているむらの青年たちに、この取り組みが様々な変化をもたらしていると感じています。これは10年は続けたいと思っています。

田舎のヒロインわくわくネットワーク

キエ子 100人集まったところで話をすると2、3人うんうんとうなずいてくれる人がいると元気づけられますよね。そういう意味で、田舎のヒロインネットワークはそういう、うんうんがすごかった。目指すものが似ているというか、求めている人がたくさん集まっていた。でも50歳代になったら目指すものも違ってくるだろうし我々は卒業



ログ〈えとわす〉

して別のネットを広げてつながってあげたいと思います。若い人にもっともって来てもらってやって欲しいと思いますね。実行委員会でも各地でヒロインネットがうぶ声をあげることを願い、地域で集会を持ち、全国集会は何年か後に集まろうということになれば集まれば良いという話をしました。

グループというのは、集まるとそのまま行きやすいですよ。しがみついていると硬直するのが早いし、柔らかいうちに交替できればいいんです。

※栗田キエ子さん・和則さんは、山形県金山町で親子3世代で農林業を営みながら、2つのログハウス「暮らし考房」を開き、年1回「山里フォーラム in かねやま」を開催し、地域の人と山菜研究会を作ると、地域に根ざし、地域の人と共に生きる、そして声高でなく絶えず外へ発信するその姿勢にひかれて山形をたずねてお話をうかがいました。

自分の楽しいことは、人とも共有したいと、キエさんは訪れた人に藍染めの体験ができるようにと工房を開放されている。

藍の液をくぐった白い布は深い緑色に、それが空気にふれて青に変わっていく、何度も藍をくぐることによって、藍の色が深まっていく。人も多くの出会いをくぐって深みをましていくのだろうか。1996年夏。 まとめ・佐藤弘子

農業の現場からメッセージを語り続けたい

小林 郁恵 (宮城県/協同組合ビガファーム・蔵王)

育てた牛がウイナーに

「こんなに安いのでは、自分達で食べた方がいいんでねえか?。」牛肉輸入自由化のあおりを受け牛の値段が急降下。年をとった老廃牛を市場に出そうものなら、諸経費を支払ったら赤字という時期もありました。食べようといっって引き取ってはみたものの、老廃牛の肉は硬くてあまりおいしいものではありません。「ウイナーなんて作れねもんがや?」牛肉の加工を委託している仙南加工連に相談して、試作してもらったのが、ビガビーフウイナーの始まりです。もう3年前の話です。それを仲間の酪農家に食べてもらったところとても好評。「こんなにうまい物私達だけ食べて

はもったいない。もっと沢山の人達に食べてもらおう。」と、まずは友人知人を頼って口コミで少しずつ販路を切り開いて来ました。当初9戸の酪農家と数名の有志で販売活動をしていた訳ですが、毎日牛ばかり相手にしている私達が人に物を売るなんて生まれて初めての行為。思いをうまく伝えられず「食べてみて。」と、ただで配る方が多くて、かなりメンバーの負担になっていたと思います。それでも何とかかんとか売れるようになり、本格的に売ってみようと広く組合員を募り39名で協同組合を設立したのが95年7月。

人と地域が必要とする仕事おこしを旺盛にし地域づくりに貢献しよう、ネットワークを広げて全国の仲間と連帯しようと目標を掲げ、その事業の